ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　後日談２　日曜日

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18698187

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, エク霊, 霊幻総受け, 3P

元ヤクザのモブと一度失踪した師匠との後日談です。師匠は元々エクボと付き合っていました。３Ｐですが、本番しているのはモブ霊のみです。暴力表現があります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

詐欺師のスティグマ　後日談２　日曜日

相談所のドアを開けると、清々しい風が吹き抜けていって。
「おはよう、モブ」
師匠が微笑んで立っている。
たったそれだけのことが信じられないほど嬉しい。少し前まで、完全に失われたと思っていた光景だからだ。
「今日の依頼は……」
それに今日は日曜日だ。師匠が僕だけのお嫁さんになる日。師匠の薬指には僕から贈った指輪だけがはまっている。思わずニヤついてしまった。
「きいてるのか？」
「あ、すみません。きいていませんでした」
「お前な……ま、どうせ俺が同行するからいいんだけどよ」
「一つ目は外回りですか？遠くなら何かご当地のもの食べて帰りましょうよ」
「……それも悪くないな」
師匠があごに手を当てる。指先の絆創膏が痛々しい。
「……やっぱり僕１人で行ってきましょうか」
師匠が片眉を上げる。
「余計な気を使うな。お客様は『霊幻新隆』に依頼したんだぞ。俺が行かなくてどうする」
師匠がそう言うなら仕方ない。
出張除霊は問題無く終わり、僕は適当な茶屋で、師匠とご当地の少し変わったみたらし団子を食べていた。
師匠はほんとにすごい。
手足の爪を剥がし、足の裏を切られた拷問からまだ１週間と少し。まだまだ足の裏も痛むだろうに、平気で依頼をこなしている。流石にマッサージ……呪術クラッシュはエクボが連れてきた外注の人に頼んでいるけども、それを自分でやるようになるのも時間の問題だろう。
「師匠」

頬についたタレを指でぬぐって舐めると、師匠が顔を赤くする。
「ばっ……かモブ、こんな外で何してんだよ」
「いいじゃないですか。もし不快なことを言う人がいたら、僕が排除してあげますよ」
暴力も超能力も、上手く使えばとても便利だ。僕はもうそれらの使い方を知っている。
「……モブ。排除を最優先にするんじゃない」
「分かってますよ」
しまった。師匠にバレないようにしないといけなかったんだった。
「そういうのは、最後の手段だ。それでも避けられるなら避けた方がいい」
「ええ、そうですね」
懐かしいなぁ。この優しい言葉だけを信じていられた頃が恋しい。

一度暴力装置になってしまった僕は、身に付いた思考を完全に忘れることは出来ない。
それが未然に師匠を守ることもあると知っているからだ。

「モブ、相談所を再開する時に約束したよな？もうヤクザみたいなことはしない、って。暴力も超能力も、ヒトには向けない、って」
「もちろんです」
すみません、師匠。僕は口から流れるように嘘も付くようになってしまったんです。でも仕方ないですよね？貴方が僕を捨てた５年間で、僕は貴方の可愛い弟子のままではいられなくなった。

僕を可愛い「モブ」で居させたかったのなら、貴方は僕を裏切ってはいけなかったんだ。

でもきっとそんなに問題は起きない。僕が暴力を振るうのは基本的に師匠か相談所のみんなが危ない時だ。ほとんどが敵の悪霊相手だ。
だから師匠みたいに危なっかしいことをみんながしなければ、僕だって人を殴らずにすむ。

この前だって、相談所に「霊感詐欺師め」って怒鳴り込んできた人が手にナイフを持っていたから、迷わずナイフを奪ってから相談所のドアから引きずり出して、階段の下まで蹴り落としただけなのに、師匠にめちゃくちゃ怒られたし。やりすぎだ、って。理不尽だ。僕はむしろ、師匠が甘過ぎると思う。凶器を持ってカチコんできた相手なんて、再起不能にしておかないと、危なくて仕方ないじゃないか。僕や律とかがいる時ならいいけど、師匠が１人の時に来たらと思うとぞっとする。
「師匠、長生きしてくださいね」
「なんだよ突然、縁起でもねぇ」
みたらし団子の串をかじる師匠に笑みが漏れる。
幸せは、師匠の形をしている。
「師匠が死んだら、世界を滅ぼしますね」
「何言ってるんだよ」
いらない。師匠以外いらない。もし師匠が死んだら、僕も後を追おう。その前に、師匠を殺したこの世界に責任を取ってもらおう。
「自分が世界の命運を握ってると思ったら、嬉しくなりませんか？」
「何言ってんだよ、本気でそんなこと思ってたら俺は病院に行った方がいい」
「ほんとなのになぁ……だから気をつけて下さいね、師匠。うっかりはダメですよ」
うっかり誰かに怪我をさせられたりしたら、その誰かが死んだ方がマシな目に遭うのは、師匠のせいですよ。
「ん。美味かったな」
ぬるくなった番茶をすする師匠をじっくり眺める。
あー、師匠の髪の毛はひだまりみたいだなぁ。

帰りの電車が混んでいて。
こんなことならタクシーにしたら良かったな……と思っていたら。
「んっ……も、ぶ……」
助けを求めてきた師匠に目を見開く。
見知らぬ男性の手のひらが、師匠の身体をまさぐっていた。

「そっち……引っ張って……」
何とか痴漢から逃げようと手を伸ばしてきた師匠を掴みながら。

僕は痴漢の手のひらの皮を超能力で剥がした。

「ぎゃあああぁあああああああ！」
痴漢の悲鳴が上がって、混雑した車内に血の匂いが漂う。
──師匠を勝手に触った報いだ。
「モブ……？お前、まさか」
薄ら笑いを浮かべていた僕に師匠がたしなめる顔で話しかけてくる。
「僕じゃないです」
能力を持たない師匠には、ソレが誰の仕業なのかは分からない。
「可哀想ですね」
「……そうだな」
師匠は暗い顔をして俯く。少し心が痛んだ。師匠を悲しませたかった訳じゃない。
「男が痴漢された時の立件はすごく難しいから、この方がいいんですよ」
「……モブ。俺のためにやってくれたのはありがとな。それは分かってる」
ぶわ、と嬉しくなる。やっぱり師匠は僕のことを分かってくれる。
「でもな、モブ。俺はお前が人を傷付けると、すごく悲しいよ」
「……ごめんなさい」
うーん、これからはバレないようにしないといけないな……。

※

「晩飯、ラーメンでも食って行くか？」
「どうせなら手料理が食べたいです」
言ってから、後悔した。この手の？師匠に？手料理をさせようとする？？
典型的なハラスメント夫か、僕は。

「鍋とかならできるんで」
苦し紛れに『自分が手料理を振る舞うんですよ』感を出してみる。
「……本当か？」
めちゃくちゃ師匠が疑ってくる。
「任せてください」
引き下がれなくなってしまった。
スーパーで肉と魚と白菜と豆腐を買う。
「……」
そのラインナップを師匠が微妙な顔して見ている。
「こういうの買うと楽なんじゃないか」
大きな鍋のタレの袋を師匠が両手で持ち上げるから、慌ててそれを奪った。傷に響くから、モノ持たないで欲しい。
「大丈夫です」
鍋ができる、と豪語した手前、そういうキットは使えない。代わりに利尻昆布と１番高い鰹節をカゴに入れた。
「俺も半分出すよ」
材料費を出そうとするのを断って、買い物を終える。
タクシーを拾って、僕のマンションまで行ってもらった。
「……いつもこんな贅沢してるのか？」
「昔は若いのが送り迎えしてくれてたんですけど、今は仕方ないのでタクシーです」
「……お金は大事にした方がいいぞ、モブ」
「はい」
いちいちめんどくさいなぁ。まぁ、超能力で飛んで帰ればいいか……。
マンションの最上階にエレベーターにカードキーを挿して向かう。
さて。
「あれ……」
鍋の場所が分からない僕に師匠が疑いの目を向ける。
僕は冷や汗をかきながら記憶を探って鍋を見つけ出す。ハラスメント夫にならない為に必死だ。
鍋に水を入れ、昆布と鰹節を入れる。そこに切った白菜を入れた。
「えっ」

師匠が声を上げた。
「モブ、本当に大丈夫か？」
「大丈夫です。影山家のやり方です」
ごめん、母さん。たぶん違う。ここまでくると後に引けない。豆腐を切って入れる。そこに肉と魚を入れた。
「……」
師匠が神妙な顔をして腕を組んでいる。
あっそうか、味付けしないと。僕は師匠の顔色を見ながら、塩を入れて、醤油を入れた。
「……モブ、味見はいいのか？」
あっそうか、味見してみればいいのか。
ずずっ。
……薄い。僕はドボドボと醤油を入れる。
「あっ」
師匠が慌てた声を上げる。味見をしたら、しょっぱかったので、水を足した。……砂糖を足したらそれなりになるかな？
「モブ、そういう時は、一回スープを捨てるんだ」
なるほど。汁を半分ほど捨てて水を入れる。……絶妙にマズい。醤油を入れたら……。
「モブ、充分に味がついたと思うから、もう食べよう」
「……はい」
鍋って意外と難しい……。
でも。
控えめに言ってもマズい鍋を、師匠は文句も言わずに食べてくれる。嬉しい。
「モブの手料理、嬉しいよ」
顔は引き攣ってたけど。

※

先に師匠にお風呂に入ってもらって。
風呂から上がった僕は、もう我慢できずに、ベッドでくつろいでいた師匠に襲い掛かった。

「師匠、いいですよね？」
逃げ腰になった師匠を抱き寄せて唇を重ねる。歯がガチガチ当たるのも構わず、うっすら甘い口の中を舌で探る。
「いひゃっ……いひゃいよ、もぶ……」
逃げようとする後頭部を捕まえて、キスを深くする。すり合わせる粘膜が心地よい。吸い上げた舌をガブリと噛んだ。
「いっ！」
師匠の目尻に涙がたまる。可愛い。
口を離して師匠の泣き顔を堪能してから、首筋に吸い付く。唇になじむ肌が気持ちいい。──思いっきり吸い上げた。
「……っ」
師匠の喉がひくんと震える。
「あ……」
服をまくり上げて乳首に触れると甘やかな声が漏れて、ぐあっと頭に血が上る。
師匠のスウェットと下着を奪い取って、がばっと足を広げた。
「ちょっ……」
指をベロリと舐めて師匠の後口にぐにぐにと埋め込む。
「いっ……モブ、もっと、優しく……」
「すみません」
余裕が無い。獣みたいな自分の呼吸音がうるさい。
慣らしたアナルに取り出したペニスを押し付ける。
「モブ、待っ……っあああああ！」
一気に貫いた。ポロポロと師匠の目から涙が溢れて可愛い。
「いっ……たい、モブ、きつ……ぁあっ！」
師匠が僕の背中にしがみ付く。嬉しい。
師匠の性器を擦り上げながら腰を揺らす。
「あっ、ぁ、ん、モブ、ゴム、ゴムして……」
「いいじゃないですか、子供ができるわけじゃあるまいし。それとも……」
すり、と師匠の下腹をさする。
「出来るようにして欲しいんですか？」
真っ青になって師匠が首を振る。

「なら、大丈夫ですよ」
「ぁうっ、ぐ、ん、ぅあっ……」
師匠は眉を寄せてぎゅっと僕にしがみついてくる。
「あっ、師匠、出ます」
「〰〰〰っ、」
ペニスを奥に擦り付けるようにして射精すると、師匠は目を伏せてじっと衝撃に耐えていた。
「……っ、はぁっ」
僕は師匠の陰茎を擦り上げてイカせてあげた。
「良かったですよ、師匠。愛しています」
「……うん」
僕と目を合わせずに、師匠はするりと僕の腕から抜け出して、服を着はじめた。
……え？
「ごめんな、今日はこれぐらいで勘弁してくれよ」
部屋着のスウェットじゃない。どう見ても帰宅用のスーツを身にまとう師匠に戸惑う。
「どうしてですか、今日は泊まって行くんじゃ……」
「……ごめんな、モブ。もうセックスに付き合えないんだ、今日は。そういう気分になれなくて」
師匠はまだ勃っている僕の下半身から目を逸らす。
そこで雷に撃たれたみたいになった。
「……僕のセックス、ダメでしたか？」
「いや！そういう訳じゃないんだが……ちょっと……」
「ちょっと？ちょっとなんなんです？」
「……とにかく、もう、帰る」
混乱する。何かがダメだったんだ。でもその何かが分からない。師匠は僕のプライドに配慮して教えてくれそうにない。
どうしよう。誰か、教えて欲しい。
そこで、はっと悪霊の友人の顔が思い浮かんだ。
「……分かりました。僕のセックスが下手だったのなら、エクボとの３Ｐならどうですか？」
僕は師匠から嫌われまいと必死だった。

「……え？」
「僕だって上手くなりたいです。エクボならきっと教えてくれる。それならどうですか」
師匠の目が揺れる。
「師匠だって日曜日が来る度にヘタクソに抱かれるのは嫌でしょう？師匠が言いづらいなら、エクボに言ってもらいましょうよ」
師匠はしばらく考えてから、ゆるゆると頷いた。
……そこまで僕のセックスってダメだったのか。ちょっとショックを受けながら、スマホでエクボに連絡する。
『うーい。なんだよシゲオ』
遠くでテレビの音がする。くつろいでいたらしいエクボに師匠を上手く寝取る相談をすることに少し罪悪感が沸く。
「あの……今日、良かったら３Ｐしない？」
『は？……なんでだ』
エクボは３Ｐをしたがっていたから、すぐ賛成してくれるかと思ったが、思わぬ低いテンションにぐっと詰まってしまう。
「その……エクボと師匠がヤってる所を見せて欲しくて……」
『だぁから、なんでだよ』
この悪霊は、言わせようとしているのだ。ほんとに性格が悪い。
「今日、師匠にセックスを一回で拒否されて……ちょっと、僕のやり方、まずかったみたいで」
はっ、と電話の向こうから馬鹿にした笑い声が聞こえてくる。
『抱き方を教えて欲しい、ってか？……いいぜぇ。ただし条件がある』
ほっとした。肩の力が抜ける。
『隠しマイクを仕込んでたなら、あるんだろ？隠しカメラってやつがよぉ』
ごくり、と唾を呑む。こそこそと師匠から電話を遠ざける。
『監禁中の、霊幻が犯されてる時の隠しカメラの映像を寄越せ。それでレクチャーしてやるよ』
「……分かった」
抜け目ない悪霊だ。僕は秘蔵のオカズを差し出すことになった。師匠にバレないようにデータを準備しないと……。

『どうせお前の部屋にはろくに道具も揃ってないんだろ。俺んち来い。霊幻に代われ』
スマホを師匠に渡す。師匠がエクボと話している間にデータを大急ぎで用意した。
「うん……まぁ、そんなところだ……いや、そうじゃないけど……うん、うん、そう……じゃあ、モブに代わるな」
スマホを受け取る。
『シゲオか？じゃ、マンションで待ってるから、早く来いよ』
一方的に電話は切られる。
僕はタクシーを呼んだ。
気まずい沈黙の中、師匠とエクボのマンションにタクシーは走った。

※

「た……」
「いらっしゃい」
ただいまと言いかけた師匠を遮って、エクボが他人行儀に声をかける。
今は僕の時間だ。気を使ってくれたのだろう。
「……おじゃまします」
師匠も言い直してマンションに入る。
適度に散らかっていて、生活感のある部屋だ。
「ほらよ」
エクボは師匠と僕にハンガーを渡してくる。僕は上着をハンガーにかけて、壁のでっぱりに適当に引っ掛けた。
「準備しておいたから、早速ヤろうぜ」
クイーンサイズのベッドが置かれた薄暗い寝室に喉が鳴る。
「師匠っ」
「霊幻……本当にいいか？」
あ。
エクボがうやうやしく師匠の手の指にキスをしていて、僕はとたんに恥ずかしくなった。

僕はちゃんと師匠の気持ちを聞いていただろうか？有無を言わさずセックスしようとしていなかっただろうか？
「……いいよ」
師匠がエクボの髪を撫でる。チリっとした嫉妬が胸を焦がす。でも仕方ない。３Ｐを申し出たのは僕なんだから。
「ちょっと気になることがあるから、今回は俺様基本的には見てるわ。適宜、霊幻にちょっかいだす感じで」
「……それでいいのか？」
「霊幻がシゲオに抱かれてんの見るのもオツなもんだよ。ほら、始めようぜ」
ぱんぱんとエクボが手を打つ。
「師匠……」
ぐいっと引き寄せた師匠に口付けようと目を閉じて。
「はいストップ」
エクボに止められた。
「お前、霊幻をなんだと思ってやがる。ぐいぐい引っ張るな、痛ぇだろうが。乱暴に振り回すんじゃねぇ」
言われて血の気が引く。そうか。僕は師匠を引っ張り回してしまっていたのか。
「自分から近寄るんだよ」
困ったように目を伏せる師匠に近寄り、グイッとアゴを持ち上げて唇にかぶりつく。ガチっと歯が鳴った。
「ストーップ」
エクボが呆れたように声を上げる。
「シゲオ、お前ホントに霊幻をなんだと思ってんだ？ダッチワイフじゃねぇんだぞ。天地無用の壊れ物だ。レイプしてんじゃねぇんだから、もっと優しく扱え。そうだな……力を込めたら崩れるソフトクリームだと思うぐらいが丁度いいだろうな」
ソフトクリーム……そう言われると分かる気がする。
そっと師匠の頬に手を当てて、ちゅ、ちゅ、と柔らかく何度も唇を落とすと、師匠の身体の力が少しずつ抜けていくのが分かった。
ずっと緊張してたんだ。悪いことしたな……。
できるだけ優しく、舌で口の中を探りながら、師匠の服を脱がせて

いく。
「スーツ皺になるから、ハンガーにかけてやれよ」
シャツとシャツガーター、下着、靴下とソックスガーター姿になった師匠を欲望のままに襲いたくなるのを我慢して、床に落としたスーツを拾ってハンガーにかける。
意外と気を使う事って多いんだな……。
ソックスガーターを外して、靴下を脱がせて、包帯で巻かれた足が出てきてぎゅうっと心が痛くなる。
「……僕がもっと早く行けていたら……」
恭しくおしいだくようにして、師匠の足の甲の包帯に口付ける。
「お前のせいじゃないさ、モブ。これは……自業自得ってやつだからな」
暗い。
暗い気持ちがぞわりと身体を満たす。
「そうですね……元はと言えば、師匠が僕たちを捨てたせいかもしれません」
「……すまなかった」
「いいですよ。今はこうやって僕の腕の中にいてくれるんですから。でも……」
ひたりと師匠を見据える。
「次はありませんよ。今度いなくなったら、僕は何をするか僕自身が分かりません」
反対の足の靴下も脱がせる。
「──っ、もう、どこにも行かないって」
「ええ、そうしてください」
白くて長い足を手のひらでじっくりと撫でる。
「っん……」
くすぐったそうに師匠が鼻にかかる声を出した。色っぽい。
「師匠……」
また柔らかく唇を重ね合わせながら、シャツのボタンを外していく。
パサリとシャツをベッドの上に落として。真っ白な上半身にくらくらする。呼吸で上下する胸の肉感に興奮する。

──痕、つけたい。
「師匠」
顔を上げた師匠が興奮した僕の顔を見て怯えた表情になる。
師匠の首筋に噛みつこうとして。
「っ馬鹿やめろ！」
止めたエクボの手に噛み付く形になった。
「〰〰〰ってえ！シゲオお前、こんな力で霊幻に噛み付く気だったのかよ！馬鹿かお前は！下手すりゃ霊幻を殺しちまうぞ！！」
びくりと震える。
「色んな格闘技で噛み付きが禁止されてる理由を考えてみろ！人の顎の力ってのは思ってるよりも強いし、唾液から変なバイキンに感染したりするんだよ。いいか、基本的には噛み付くんじゃねぇ。プレイでも甘噛み程度にしとけ。キスマークもつけ過ぎんなよ、鬱血痕なんだから青タンみたいなもんだ。霊幻が痛ぇだけなんだからな」
言われてみれば当たり前のことで、シュンと落ち込んでしまう。僕は欲望のままに師匠に無体を働きすぎていた。
「ごめんなさい……」
「……あんまりガミガミ言ってやるなよ、エクボ」
とうとう師匠が助け舟を出すぐらいだ。
「モブは言われれば分かるさ。そんなにキツく言わなくていい」
「そうやってお前が自分で言わないで甘やかすから、シゲオが俺に泣きついてきたんだろうが」
「うっ……そうだな。今度から俺も嫌なことは言うようにしていくな？」
師匠の絆創膏の貼られた白い指が、優しく僕の髪をすいていく。
「師匠……師匠、僕、師匠を抱いてもいいですか」
「当然だろ。全然かまわん」
優しく笑う師匠の下着に手を掛ける。
脱がせて、自分も服を脱いだ。
「ローション使えよ。アナル用だ。お前も買え」
使いかけのローションのボトルをエクボから渡される。
「さっき慣らしたから……」

「は？」
エクボの眉間の皺が深くなる。
「前戯の手ぇ抜くな。アナル切れたらどうする。そんなに霊幻に痛い思いさせてぇのか？ダメなサドかお前は」
……言われてみるとごもっともで。意外とセックスってめんどくさいんだなって思い知る。
いや、今まで師匠が我慢してくれてただけか……。
「ん……」
ローションを絡めた指を入れると、ごぷりとさっき出した精子が師匠の後ろから溢れ出る。
「……！ゴムしろ馬鹿！！」
それを見てエクボが怒鳴った。
「中出しされっと次の日１日中、腹イテェんだぞ！？ホントお前霊幻のこと何だと思ってやがる！！」
あ、ダメだ。
自己嫌悪が酷すぎて、勃たなくなってきた。
「すみません、師匠……僕、知らなくて」
落ち込む僕の髪を師匠が優しく何度も指でほぐしてくれる。
「大丈夫だよ。ちゃんと気持ちいいから。指でもっと気持ちいいことしてくれるか？」
「……はい」
中出ししたのを掻き出しながら、師匠の中を探る。
「あっ……モブ、そこ、気持ちいい」
指が少し弾力のある部分をとらえた。
「ここですか？」
「うん……きもちい、よ」
はぁっと師匠の口から悩ましい吐息が漏れる。その唇を、エクボのごつごつした指がすりすりと撫でた。
「ぅあっ！ちょ、突然押し込むな、って」
どうしても嫉妬してしまう。つい手に力が入った。
「師匠、もっとほぐした方がいいですか？」
「もう、大丈夫だと思う」
師匠の後ろは随分柔らかくなった。アナルってこんなに広がるんだ

なぁ……。
エクボが差し出してきたコンドームの封が切れない。ローションでヌルヌルの手だと難しい。
「ゴム破かないように気をつけながら、歯で噛み切れ」
あれってカッコつけてるわけじゃ無かったんだな……。
ゴムの封を口で何とか開けて、ガチガチになっているペニスに装着する。結構難しいんだな、コレも。
「師匠……挿れますね」
「ん……」
師匠が枕元にいるエクボの目を手で塞ぐ。
「おいコラ、いい所だろうが」
「ダメ。見るな」
そのやりとりに嫉妬しながらも、ゆっくりと挿入していく。
「ぁっ……ん、んん……」
師匠が甘やかな声を上げる。そっとエクボから手を外して、師匠はエクボと手を恋人繋ぎにした。
「……っ」
嫉妬で超能力が漏れてしまいそうで、とにかく師匠をイかせたくて僕はさっき見つけたイイ所を狙って腰を打ち付ける。
「あっ、ん、んぅっ、あ、ああ……」
師匠から嬌声が漏れる。
「んぁ、あ、あ、ぁあっ、んっ」
この辺かな……。
「ぁ、あ……ん、モブっ、その……」
「はーいストップ。ピストンが大きい上に長え。乾くからローション足せ」
慌てて性器にローションを塗る。
「なんだ？ナカで霊幻をイかせたいのか？？」
「……そうだよ」
「……あー、じゃあイイところ見つけねぇとな。奥までまず挿れてみろ」
「……こう？」
「ん、っ……」

師匠が目を閉じて衝撃に耐える。
「ちんこの形によって具合のいい場所ってのは変わるんだよ。こればっかりは試して見つけてみないとな……奥で小刻みに揺らしてみな」
ぐっぐっと押し付けるように腰を動かす。……全体が暖かい肉壺に包まれていて、どっちかというとこっちの方がイキそう……。
「んっ、んっ」
師匠はピクピクとまぶたを震わせながら吐息を漏らす。
「んー、悪く無さそうだが……一回腹側を擦りながら、ゆっくり抜いてみろ」
「は、ぅ……」
言われた通りにすると、真ん中辺りで師匠が身悶えた。
「！今の」
「そぉーだ。そこから奥までをゆっくり擦り上げてやれ」
思わずエクボを見ると、エクボも興奮した顔をしながらニヤリと笑っていた。
妙に倒錯的で、くらくらする。
ゴリゴリとカリで擦りながら奥に侵入する。
「んぅ……っ」
師匠が悩ましく目を潤ませてこちらを見てくる。
それが嬉しくて何度もゆっくり性器をこすりつけるように内壁を抉る。
「はぁ……っ、あぁ……っ、あ、あ！」
師匠がぎゅっとエクボの手を握った。
「……っ！」
ひくんと師匠の腹筋が震える。僕はぎゅうぎゅう搾られて、師匠の中でぶるりと震えながら出していた。
「師匠、気持ちよかったですか」
２人ともほぼ同時にイけた。嬉しくて幸せだ。気持ちがふわふわする。
「うん。モブも気持ちよかったか？」
「はいっ」
「そっか。練習台になれたなら嬉しいよ」

氷を、飲ませられたのかと思った。
「モブはきっと誰を恋人にしても、上手くいくから」
微笑む師匠に、冷や汗が止まらない。
「師匠、僕は師匠が好きです」
「俺もモブが好きだよ」
「師匠、師匠、僕は師匠を愛しているんです」
「俺もモブを愛してる。お前は俺にとって本当に大事なんだ」
違う。通じてない。思わずエクボを見る。
「これ、どうしたらいいの」
悪霊は悪霊らしく笑って。
「自分で考えな」
これぱっかりは、教えてくれなかった。

手料理とか夢見てる場合じゃなかった。僕は焦って叫ぶ。
「僕は師匠が好きなんです！」
「俺もモブが好きだってば」
困ったように笑う師匠との。
長い攻防戦が始まった。

日曜日は攻防戦。

続